

「い〜ぐる」開設から1年の運営状況と 今後の方向性への一考察

こどもケアセンター運営委員会

広島都市学園大学

要 旨

本稿では、まず「公募型オープンスペース こどもケアセンター い〜ぐる」の開設から1年間の運営状況を報告する。その上で、今後の運営上の留意点として、①「安全・安心」な子育てに寄与できる場としていく必要があること、②0歳、1歳の利用者が多く、その年齢に対してどういった支援が必要であるのか、また2歳以降の子どもたちも利用しやすくするために何が必要かを検討する必要があること、③子育てへの不安を払拭するために必要なことは何かを精査するとともに、不安解消のための一つの手立てとして子育てへの父親の参加を促すために必要なことは何かを考えることを挙げた。

キーワード：こどもケアセンター、公募型常設オープンスペース、「安全・安心」な子育て

はじめに

広島都市学園大学（以下、本学）は2014年4月に子ども教育学部を設置した。これと時を同じくして「こどもケアセンター」（以下、ケアセンター）を全学の附属施設として開設した。ケアセンターはその運営方針として、大学の地域貢献として子育て支援に取り組むことによって、「他者をケアし、ケアされる地域社会」をつくり（Caring Communityの創造）、「地域の人々が互いに認め合って自分らしく生きること」につなげること、ケアすることに関する研究（Research on Caring）、すなわち子育て・子育てに関する研究や、保育・教育研究、地域研究、高齢者研究に取り組むことの二点を掲げている。

上述の第一点目の具体化として、広島市の選定を受けた「公募型常設オープンスペース こどもケアセンター い〜ぐる」の運営を行っている。すでに別稿にて報告しているが（児嶋他、2014）、ここでは簡単にその経緯について振り返っておく。

児童福祉法には「子育て支援事業」が規定されており、その具体的な内容の一つとして「地域子育て支援拠点事業」がある。広島市はこの「地域子育て支援拠点事業」の一環として「公募型常設オープンスペース」を選定し、補助金を交付している。

この事業の目的として広島市は、「子育て家庭の親とその子ども（概ね3歳未満の乳幼児及び保護者。以下「子育て親子」という。）がいつでも気軽に集い、相互交流を図るとともに子育ての相談が受けられる場（以下「公募型常設オープンスペース」という。）を開設することにより、子育て家庭の孤立化を防止し、保護者の子育てに対する不安や負担感の軽減及び地域における子育て力の向上を図ること」を示し、その事業内容として「ア、

子育て親子の交流の場の提供と交流の促進（通年）」「イ，子育てに関する相談，助言の実施（通年）」「ウ，地域の子育てに関する情報提供（通年）」「エ，子育て及び子育て支援に関する講習会等の実施（月1回以上）」を挙げている。広島市は2014年4月から南区内の翠町中学校区を除く地区において「公募型常設オープンスペース」の設置・運営を行う団体の募集を開始した。

本学は「こどもケアセンター運営委員会」を結成し，その運営方針等を検討することとなっている（2014年度は本学子ども教育学部子ども教育学科に所属する専任教員5名が所属）。同委員会では，ケアセンターが「公募型常設オープンスペース」の設置・運営を担うことによって，ケアセンターの掲げる目的を達成することが可能となると判断し，この募集に応募した。広島市による選考を経て選定団体となり，2014年7月1日から「い〜ぐる」を開設した。

「い〜ぐる」は開設から1年を経過した。本稿では1年間の運営状況を示すとともに，今後の運営における留意点を挙げ，若干の考察を加える。この作業を行うことは，今後上述のようなケアセンターが掲げる目的を達成するための土台になると考える。

1. 運営状況の把握の方法

広島市から選定を受けた「公募型常設オープンスペース」は，毎月「地域子育て支援拠点事業実施状況報告書」の提出が義務づけられており，同報告書は「公募型常設オープンスペース利用状況報告（月例集計表）」「情報提供・講習会等実施状況報告」の二つで構成されている。

「い〜ぐる」では利用者に受付名簿への記入を依頼し，この受付名簿も使いながら開設日ごとに「い〜ぐる日誌」を記録している。上述の「公募型常設オープンスペース利用状況報告（月例集計表）」は，この受付名簿及び「い〜ぐる日誌」を基に作成している。

本稿では，「公募型常設オープンスペース利用状況報告（月例集計表）」及び受付名簿，「い〜ぐる日誌」を使用し，開設から1年間の運営状況を示す。

2. 運営状況の報告

(1) 開設日数

「い〜ぐる」は通常，月～金曜日の午前10時～午後3時に開室している。大学行事（たとえば，入・卒業式，入学試験等）により，「い〜ぐる」が位置している本学2号館が使用不可能な場合には閉室とし，また広島市に各種災害警報が発令されている場合には休室としている。

2014年7月～2015年6月の1年間（以下，特に示さない場合，本稿で扱うのはこの期間のこと）で229日開室した。月毎の開室日数は表1の通りである。2014年8月は他の月と比べて開室日数が少なくなっているが，これは当初から予定していたお盆による大学休業日に加え，各種災害警報が頻繁に発令されたという天候不順による。

(2) 利用人数

子どもの利用者は延べ3,084人、大人は2,829人（計5,913人）であった。1日に平均で子ども13.5人、大人12.4人（計25.8人）が「い〜ぐる」を訪れてくれた。開設から2ヵ月を経過した2014年9月に1日平均で子ども16.5人、大人15.6人という最大値を記録し、その後2015年3月まで減少傾向を示したが、2015年4月以降増加傾向を示している（図1）。

(3) 新規利用家族数

2014年7月は開設した月であり、ほとんどが新規利用家族である。そのため当該月を除いて、1ヵ月間にどれだけの新規利用家族があったかを見ると、2014年8月～2015年6月の期間で新規利用家族が340家族であった。毎月平均約30家族が新たに訪れてくれたことになる。

新規利用家族の子どもの年齢構成を見ると（図2）、0歳台、1歳台が大半を占めていることがわかった。

表1 開室日数

年 月	開設日
2014年7月	23
2014年8月	12
2014年9月	20
2014年10月	22
2014年11月	18
2014年12月	20
2015年1月	19
2015年2月	18
2015年3月	21
2015年4月	20
2015年5月	18
2015年6月	18
合 計	229

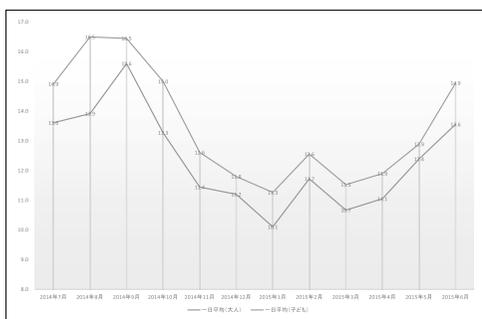


図1 1日の平均利用者数

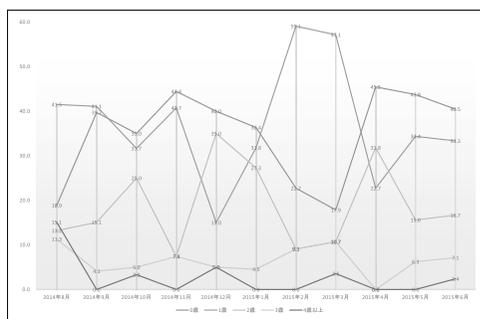


図2 新規利用の子どもの年齢構成

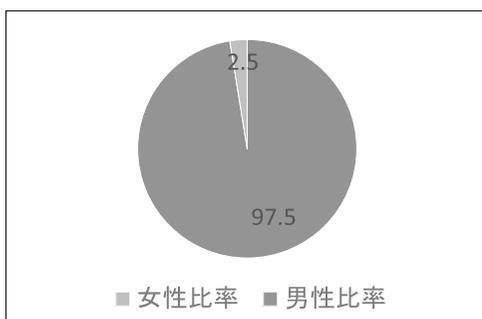


図3 大人の男女比率

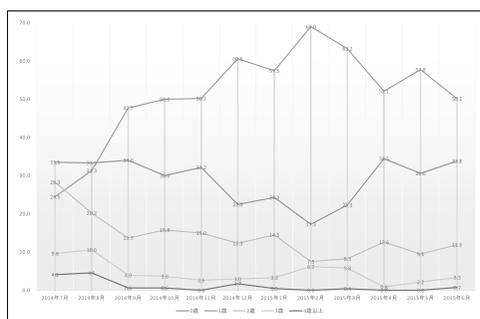


図4 子どもの年齢構成

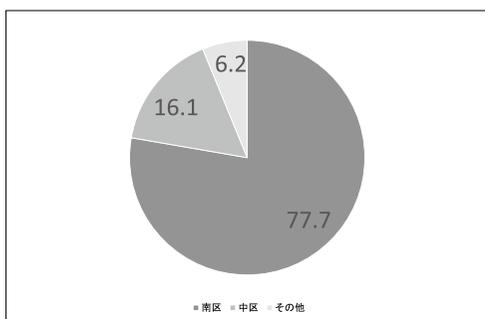


図5 利用者の居住地の割合

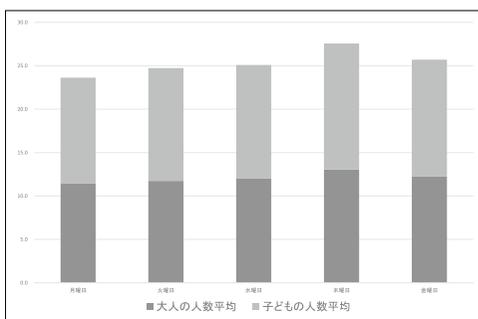


図6 曜日別の平均利用者数

(4) 大人の男女比

大人の利用者の男女比を見ると(図3), 1年間の平均で女性が97.5%, 男性が2.5%であり, 圧倒的に女性が多いことがわかった。

(5) 子どもの年齢構成

利用している子どもの年齢構成を見ると, 1年間を平均して最も多いのが1歳台で50.3%, 次いで0歳台が29.4%, 2歳台14.6%となっていた。3歳台, 4歳台は合わせて6%ほどに留まっていた(図4)。

(6) 利用者の居住地

利用者の居住地の構成を見ると, 「い〜ぐる」が位置する広島市南区が1年間を平均して77.7%と圧倒的に多く, 次いで南区に隣接する中区が16.1%であった。その他の区などを合計しても6.2%という低い割合になっていた(図5)。

3. 運営状況に対する若干の考察

これまで, 「い〜ぐる」の1年間の運営状況を報告してきた。以下, 今後の運営において留意しなければならないと考える点をいくつか挙げ, 若干の考察を加える。

(1) 利用人数の増減の要因

上述のように, 「い〜ぐる」の利用者は1日に平均で子ども13.5人, 大人12.4人(計25.9人)となっていた。これを曜日別に見てみると, 大人と子どもを合わせて最も利用人数が多いのが木曜日(平均27.6人), 次いで金曜日(平均25.7人), 水曜日(平均25.1人)となっていた。また, 最も少ないのは月曜日(平均23.6人)であった(図6)。

最大の木曜日と最小の月曜日には4人しか差がなく, 誤差の範囲と見ることもできるであろうが, 週末に家族で遊びに出かけ, その疲れのために月曜日は家でのおんびりしているという利用者の声を聞く。逆に言えば, 「い〜ぐる」の利用者は週末に家族で出かける機

会をもてる層であるということであろう。

「い〜ぐる」が所在する広島市南区宇品地域は、都市開発が盛んで、若年層家族の流入が多い。しかも、中高層マンションなど比較的価格が高価な住宅が増えている地域でもある。「い〜ぐる」利用者に対する第2回のアンケート調査では、利用親子の母親の約8割が30代以降であるといった結果も出ている(詳細は、別稿にて報告予定)。

内閣府の『平成26年版 子ども・若者白

書』によれば、子どもの15.7%が貧困状況にある。このような状況と対比すると、「い〜ぐる」の利用者は比較的生活に余裕のある層であるといえるかもしれない。

また、「い〜ぐる」では通常の施設内での取り組みに加え、毎月2〜3回程度の特別プログラムを行っている。主には施設の裏にある砂場を使用する「砂場遊び」であるが、外に出ることが厳しい冬場には、これに代えて室内での「小麦粉粘土遊び」「新聞紙遊び」を設定した。この特別プログラムは、利用者から好評を得ているが、それが数字としても表れている。特別プログラムは2014年8月から開始し、2015年6月までに計25回行っている。この開催日の利用者数を見てみると、平均して37.6人となっており、全体平均の25.8人の約1.5倍である(図7)。

では、この特別プログラムへの期待の高さの背景には何があるのか。上述のように、特別プログラムは主に「砂場遊び」である。利用者からは、「い〜ぐる」では、子どもに安心して砂場遊びをさせることができるとの声が聞かれる。利用者からすれば、子どもに砂場遊びをさせたいと願っても、それを安全に安心してさせることができる環境が、自身のまわりに少ないということであろう。これは、現代の子育て環境が劣悪になったためなのか、それとも子育て環境に対してしっかりと目を向けるようになったためなのかといった精査が必要である。

一方、「い〜ぐる」はオープンスペースの役割として、子育て親子が安心・安全に過ごすことができる交流の場の提供をめざしており、この思いからすると利用者に対して「安心・安全」を提供することができており、そこに信頼を寄せてもらうことができていると考えられるであろう。

(2) 対象とする子どもについて

上述のように、「い〜ぐる」を利用する子どもの年齢構成は、1年間を平均して最も多いのが1歳台で、次いで0歳台、2歳台となっており、変動がほとんどない。開設から1年が経過しており、利用者が継続して利用しているとすれば、このような数字にはならないであろう。これも上述したが、2014年8月〜2015年6月の期間で新規利用家族が340家

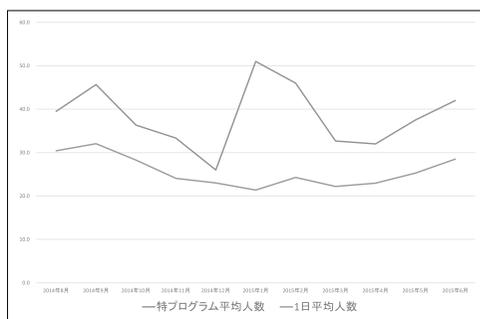


図7 イベント日とそれ以外の利用者数の対比

族であり、新規利用家族の子どもの年齢構成を見ると0歳台、1歳台が大半を占めている。このことから、「い〜ぐる」は子どもが2歳台、3歳台になると利用する割合が減少していくことが見てとれる。

これには、様々な要因が背景としてあろうが、考えられる事柄をいくつか挙げておく。まずは、「い〜ぐる」自体の環境要因である。「い〜ぐる」は「公募型常設オープンスペース」として「0〜3歳」のいわゆる未就園児を対象としているが、上述のように0歳、1歳台が大半を占めていることもあり、動きが大きく、活発になる2歳以降に子育てで親子が利用を躊躇する側面があるかもしれない。そうであると仮定するならば、今後年齢別で活動する場を設定する（たとえば、大きな動きが可能となる場）、若しくは土・日などに特別な活動日を設定するといったことが必要になるであろう。

また、上述のように「い〜ぐる」の利用者は比較的生活に余裕のある層であることが予想される。そのような層の子どもたちは、2歳以降オープンスペースという場を選択するのではなく、いわゆる「習い事」などに通うようになるのではないかと。また、3歳台では私立幼稚園への入学を見すえ、そのプレ保育への参加を始めている場合もある。このような場合には、子育てで親子は自ら場所を選択しているということであり、オープンスペースが受け止める必要性は少ない。

いずれにしろ、他の広島市内及び全国的なオープンスペースの状況を精査することで、今後「い〜ぐる」がどのような運営を行っていくべきかを検討していく必要がある。

(3) 子育ての不安を払拭する

「い〜ぐる」利用者に対する第2回のアンケート調査では、利用者の約8割が第1子と母親が利用していることが示されている。また、上述のように0歳若しくは1歳台より利用を開始している。

アンケート調査では、子育てで「関心・気がかり」なことは（複数回答可）、割合が高い順に「食事」56.4%、「トイレトレーニング」48.9%となっていた（詳細は別稿に譲る）。

現在は、メディアやインターネットの発達によって子育て情報が氾濫している。特にスマートフォンの普及は、そのような情報をより身近なものにしている。いつでも必要な情報を引き出すことが容易になった分、その情報に惑わされ、不安を覚える母親も少なくない。

「い〜ぐる」の利用者は、上述のように初めての子育てを行っている層がほとんどである。アンケート調査の結果では、子育てで頼れる人がいる割合が約7割と比較的高率であるが、逆に言えば約3割が、一人で悩みを抱え込む危険性があるということである。

「い〜ぐる」は、2015年6月から「何でも語ろう会」と題した交流会をスタートさせ、年間2〜3回行うことを計画している。この場は、子育ての悩みを出し合って共有し、誰しもが同じような悩みを抱えていることを知ることで「孤独な子育て」を払拭することを目的としている。また、毎週月曜日には「何でも相談日」を継続して設定している。

今後は、「何でも語ろう会」にどうすれば悩みを抱えた母親が参加しやすくなるのか、また上述のように、「い〜ぐる」では月曜日の利用者数が少なくなる傾向があるため、「何でも相談日」を何曜日のいつ設定すればより多くの利用者が相談しやすいのかなど、子育てへの不安を払拭するための方策を、引き続き検討していかなければならないと考える。

また、子育てへの不安を払拭する際にパートナーの存在は大きいものである。上述のように、「い〜ぐる」では、男性の利用者が2%あまりという数字である。他のオープンスペースでは父親の子育てへの参加を促すために、父親対象の講演会・講習会・交流会を企画している所もある。そういった企画の必要性、形態、内容について、「い〜ぐる」でも検討する必要がある。

おわりに

以上、本稿では「い〜ぐる」の開設から1年間の運営状況を報告するとともに、今後の運営における留意点を挙げ、若干の考察を加えた。留意点としては、引き続き「安全・安心」な子育てに寄与できる場としていく必要があること、0歳、1歳の利用者が多く、その年齢に対してどういった支援が必要であるのか、また2歳以降の子どもたちも利用しやすくするために何が必要かを検討する必要があること、子育てへの不安を払拭するために必要なことは何かを精査するとともに、不安解消のための一つの手立てとして子育てへの父親の参加を促すために必要なことは何かを考えることを挙げた。

上述のことを、ケアセンター運営委員及び「い〜ぐる」の子育てアドバイザーとともに検討し、今後の運営にあたっていきたいと思う。

ここでは、「い〜ぐる」の運営等とは離れるが、一つの課題提起をし、稿を終えたいと思う。上述のように、「い〜ぐる」の利用者の居住地は広島市南区が1年間を平均して77.7%と圧倒的に多く、次いで南区に隣接する中区が16.1%であった。「い〜ぐる」は本学の駐車場を利用することができるため、車での来所が比較的容易な環境にある。しかし、そういった条件があっても、利用者は9割以上が近隣者である。乳幼児を連れての長距離移動には困難が伴うが、オープンスペースの利用については、気軽に訪れることができるという、より近距離であることが重要なことだと考えられる。

現在広島市には「常設型のオープンスペース」が各区に1カ所ずつ設置されており、また「公募型常設オープンスペース」が「い〜ぐる」を含め4カ所ある。その設置されている地域を見ると(図8)、市の中心地に固まっていることがわかる。これでは、利用したくてもそれを断念している子育て親子がいるのではないかと危惧する。厚生労働省によると、政令指定都市の地域子育て支援拠点事業の設置数及び人口比を見てみると、広島市は最も少ない状況にある。広島市は「公募型常設オープンスペース」を増やしていく計画をもっており、現状を改善する方向ではあるが、それに留まらず「常設型のオープンスペース」を、各区の区役所の出張所等の単位毎に設置する等を検討してほしい。それが、すべての子育て親子の地域での「安全・安心」な子育てにつながるであろう。

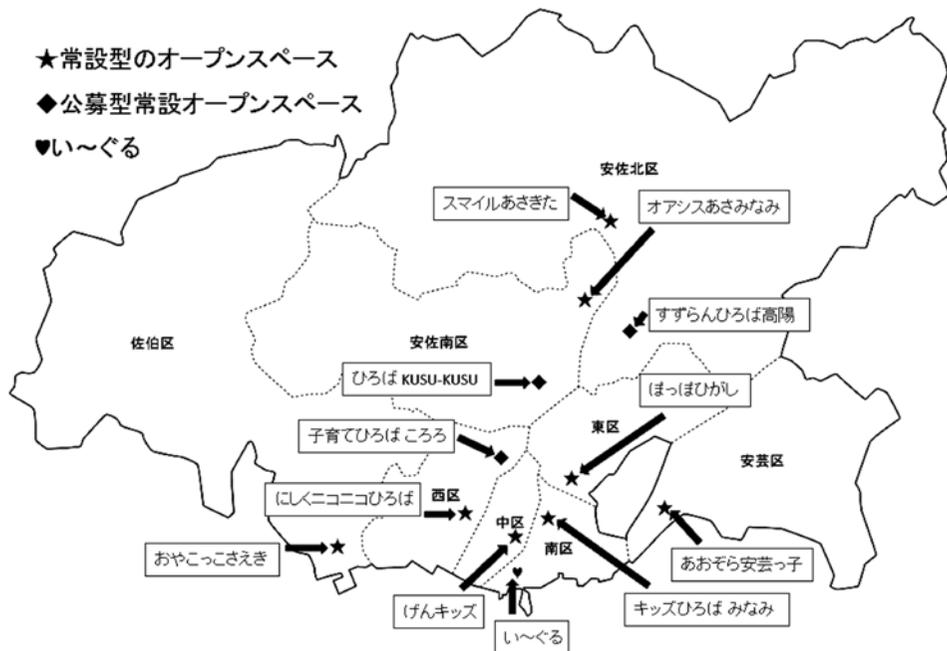


図8 広島市内のオープンスペースの配置

「い〜ぐる」では、上述のような点に留意しつつ、ケアセンターの理念を達成するために何をすべきかを検討し、実行していきたいと考える。

【附記】

2015年度のケアセンター運営委員は、石橋由美（センター長）、深澤悦子（副センター長）、杉山直子、田丸尚美、富田道子、國清あやか、須崎朝子、見嶋芳郎の8名である。

本稿は、全体執筆を見嶋が担当し、各委員が修正を加えた。

文 献

見嶋芳郎・富田道子・深澤悦子・杉山直子・石橋由美（2014）地域子育て支援拠点事業の位置づけ・役割の整理と具体的事業の現状に関する検討—広島市・公募型常設オープンスペース「い〜ぐる」を例として。広島都市学園大学子ども教育学部紀要，1（1），21-34.

厚生労働省（2012）平成24年度 地域子育て支援拠点事業実施箇所数（子育て支援交付金交付決定ベース）（<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dl/24jokyo.pdf> 2014年10月10日閲覧）